

## サルトルと私と情報公開

梅林宏道

(NPO 法人ピースデポ代表)

- **そもそもこの懇話会を始めたのも、梅林さんから決定的に受けた影響のひとつなんです。**

**司会 (猪野修治)** : それでは始めたいと思います。少し私がしゃべりたいので、15 分ほど時間を頂けますか？

今日は梅林さんのお話を伺いますが、実は梅林さんをくどくのに 3 年かかりました。いや、ほんとの話です。この懇話会をやってもう 50 何回になりますが、いろんなところからレスポンスがあったり、いろんな批判もあったり、なにか訳の分からない研究会だと言われたりしています。ですから、梅林さんにこの懇話会においでいただいたということ自体、非常に光栄に思います。というのは、「あんな研究会、なんの意味もない」と思われるのでしたら講師など引き受けていただけないでしょうし、また、そうならないように努めてきたつもりです。そもそもこの懇話会なんていうものを始めたのも、梅林さんから決定的に受けた影響のひとつなんです。

みなさんの中にも同時代で若い時からいろんな運動にかかわってきた人もいるし、そうでない方もいらっしゃると思いますが、私は 1945 年 7 月の生まれですから、戦中というのかな。60 年代が大学時代で、大学闘争があったわけです。1971 年の後半だと思いますが、たまたま私は町田に住んでおりました。その町に山口幸夫さんという方が住んでおられて、私の友人の貝沢高士くんという地学の教師をやっている男が一度山口さんと会ってみたいかと言うことで、お会いしたわけです。当時、町田の山崎団地におられましたけれども、私がお邪魔したら、山口さんと梅林さんがおられ、はじめてその時、梅林さんにお会いしたのです。考えてみますと、物理学の学生というのは、どういふのかな、やっぱり数学の世界に憧れていまして、きれいな数式なんかみると、なんて言いますか、精密で確実な学問ということで、まあ、幻想であるかもしれませんが、今でもそういうところがありましたね。そこで物理学者である梅林さんと山口さん、当時 31 歳か 2 歳だと思いますが、アメリカ留学から帰ってらして、当時のベトナム戦争に対して何かしないといけないんじゃないかということをお話しておられたのを私は鮮明に覚えています。当時、科学史家の廣重徹さんが、あれは『自然』でしたかね、『自然』に連載していらして、その内容についてもお二人が話をしていたことも鮮明に覚えています。

その後、1972 年 7 月でしたか、「ただの市民が戦車を止める会」というのをお二人が始められて、私も参画するようになったのですが、それ以降、山口さんも大学を辞められたし、

梅林さんも運動の過程で大学をお辞めになられて、相模原の戦車闘争に深く関わってこられたわけです。梅林さんは1937年生まれですから、私より8歳くらい上の先輩なんですけれども、やっぱり私にとって理想の方でしたですね。理想の方で、近づきがたかったですね。まあ、一般的なことを言えば、東京大学で博士号を取られた物理学の第一線の学者がですよ、この市民運動になぜこんなにまで関わるのかというようなことを思っていました。いつか挫折して、またアカデミズムに戻るんじゃないかと。当時、大学における研究者とはいったいどういうことなのかということをお問われた時代だったんです。それを目の当りに見てきました。ですから、今日は本当に感慨深いです。いろんな人に講師をお願いしましたがけれど、ここで私の生きざまというか、大したことはやっていませんけれど、その精神は梅林さんの始められた運動にあることをみなさんにお伝えしたいと思うんです。

ちょうどここに『ぷろじえ』という雑誌があります。私は全巻持っているんですけども、これは1969年9月に出たものです。その時の発刊の辞が、今、プリントでお渡ししたものです。1969年9月が創刊号ですから、おそらくその前に梅林さんがお書きになったものです。これが第1号なんです。ほんとに40年も前の話になるわけです。梅林さんはとにかくお忙しい方ですから、レジュメを作れないのでこれをコピーして配ってくれという電話をいただいたのでコピーしたのです。この雑誌は10号まで出ているんですが、非常に貴重なものです。最近では梅林さんの『ぷろじえ』は歴史的な産物になって、あの市民運動も若い大学院の学生諸君が卒業論文でとりあげる時代になりましたね。これをまわしますけれど、これを当時、私が憧れている物理学者の人たちが何を考えているのかと、私はむさぼり読んだわけです。物理学者の生きざま、それと同時にアメリカの出来事、軍事科学についてなどです。

そして、梅林さんたちは闘いをはじめられました。皆さんご存知のようにすごい闘いでした。徹夜監視をしたり、戦車の前に飛び込んだり、いろんなことがありまして、すごい闘いでした。それで、あのドキュメンタリーは歴史的資料となっているわけで、鮮烈に私からまだ離れてないわけです。その当時、これらをまとめられた本、『抵抗の科学技術』をお書きになりました。これは「技術と人間」から出されたものですが、これまた、梅林さんにとっても、私にとっても非常に貴重な本でした。それから、その後、『戦車の前に座り込め』という本を梅林さんたちがまとめられました。いつだったか梅林さんから私はこの本を20冊くらい頂きました。知り合いの人にあげて、今はもう手元に2冊しかありません。それから最近の書物、『沖縄の米軍』と『在日米軍』。これもものすごい本ですね。みなさん、ご存知でしょうか？沖縄の米軍と在日米軍の基地の内部を情報公開を元にして徹底的に調べあげたという書物本です。びっくりしました。

それから、恥ずかしながら私はこういう書物（『科学を開く 思想を創る』猪野修治著、つげ書房新社）を書いているんですが、この中に「市民運動家、梅林宏道の原点」という文章を書いています。初期の梅林さんの運動に触れたものですが、興味がある人は見てください。私が当時関わったのは、相模原戦車闘争のさまざまな運動ですが、その時見てい

たのはですね。これ、誤解があったら訂正していただきたいんですが、梅林さん。もう私も 61 になりまして、梅林さんの前でこんな発言をできるとは思ってなかったんですけど、もう何も言われてもいいと思ってしゃべりますけれども、若い時は梅林さんの前でしゃべるなんてできなかったんです。で、その後の経緯がいろいろと書いてありますが、横浜市の在日韓国不法占拠事件、韓国民主化運動、金大中救出運動、それからフィリピンとタイの民主運動にも具体的に関わられたんです。書物を読んで論文を書かれるというのではなくて、前回の懇話会でとりあげたグラムシではありませんが、グラムシは獄中にいて、いわゆるマルクスとかエンゲルスがものを書くような状況とは違った状況で書物を書いたわけですけど、梅林さんの場合もそうだったと思います。つまり、書物を書くことが目的ではなくて、闘いの中から出てきた文章だと思っています。

それから、みなさんご存知のように、現在おやりになっているのは、ピースデポの『核兵器・核実験モニター』で、月に 2 回だしておられます。大変忙しいわけで、例え話をしますと、マラソンランナーに「お前ちょっと待て。5 キロや 10 キロあたりのところのことをしゃべってくれないか」と言うように、再三お願いしていたわけなんですけど、梅林さんはいつも「俺はマラソンランナーなんだ。まだ止まってないんだ。そんなひまはない」と何度もお断りされた。ですが、私としましては、一応、科学史の勉強などをしているという形になっておりますので、梅林さんももう 70 歳になられることですし、1972 年からのご自分の運動と科学者としての自分の人生を 5 年刻みくらいで、どこかで、まあ、1 年に 3 回くらいでもいいですので、お話しなさっていただいて、それを記録に残して活字を起して、若い人たちに読んで欲しいなあと思っております。発表の場所がなければ、私の研究会でおやりになって頂いてもいいのです。まあ、今日はリハーサルのみでやってください。レジュメには「準備体操の場となれば・・・」とありますが、こういうお話をされること自体、そういう時期がそろそろ来たのかなあと思っております。まだまだマラソンランナーでおられまして、どうなるか分かりませんが、今日は、私が決定的に影響を受けた 1972 年の戦車闘争と科学者たち、40 年間にわたって市民運動の最前線におられる梅林さんがどういうふうにかこの 40 数年を見てこられたのかというお話を聞けるのを非常に光栄に思っております。今日は気楽な準備体操のみで話していただきたいと思っております。長い話になりましたけれど、どうぞよろしく申し上げます。

あ、その前に 1972 年の戦車闘争の時の新聞を持ってきました。これは貴重な資料ですので、ぜひまわしてください。じゃあ、よろしく申し上げます。

## 《梅林宏道講演》

- 大学に入って始まった一番大きなことは大学生協の本屋さんで並んでいる本を見えるということで、・・・「遅れてきた青年」という自覚がありました。

**梅林宏道**：紹介して頂いて、すごくしゃべりにくくなってしまいました。とにかく、もう少し整理をしてから話ができるのではないかとお引き受けた時には思っていたのですが、それよりももっと慌しく今日を迎えてしまって、非常に整理のつかない話をします。それで聞いていただく価値があるのかどうなのか非常に不安なんですけれど、今日の話で私のほうとしては少しでも整理をするためのヒントが得られればいいかなあと思っています。みなさんのレスポンスをできるだけ頂きたいと思います。

三題話のように「サルトルと私と情報公開」というタイトルをつけたのですが、案内の文章に書きましたように、私は非常にサルトルに影響を受けました。決してサルトル学者ではないし、彼の哲学をきっちり系統立ててお話しする力があるとも思っていないのですが、とにかく彼の書いたものはいろいろと読みました。それで私がいろんな行動に参加をしたり、あるいは自分の人生の岐路に立った際にはサルトルをもう一度思い起こして自分の物考えるひとつのレファレンスポイントにしているということもありまして、非常にサルトルの影響を受けて参りました。しかし、「サルトル信奉者」というような言い方をされますと、それはそれで抵抗がありまして、非常に自分勝手に、自分が課題として来たことを考える材料にしてきたというのが、むしろ当たっているかなと思います。

ことの発端をその辺の話しにしたいと思うんですが、大学に入った時には物理に非常に興味をもっていましたし、物理だけではなく、物を作ったりするのがそもそも好きな性質でして、今でも、もし時間を与えてくれれば物づくりに没頭しそうな傾向があります。大学に入った頃は、そういう中でやはり原子力というのが非常にバラ色の、科学技術を志すにあたって、まずアタックしてみたい分野であったということ思い出します。しかし、いっぽうで、私は淡路島出身で大学で東京に出てくるまで非常に田舎暮らしだったんですね。電車の音を聞くだけで「都会に出てきたなあ」と感じるような世界に住んでいました。それで、本を読むということが、大学に入るまであまりなかったんですね。大学に入って始まった一番大きなことは大学生協の本屋さんで並んでいる本を見るということで、そういう意味では、当時、大江健三郎が僕の2つくらい上だと思うのですが、彼が「遅れてきた青年」という言葉を言っていましたけれど、まさに私は「遅れてきた青年」という自覚がありました。

## ● 「人間は自由の刑に処せられている」というサルトルの考え方

いろんなものを吸収する中で、これは育ちと関係があるのかもしれませんが、「自分はどう生きるのか」ということに関心があったというふうに思います。物理や科学がかかえている決定論というんですかね、ひとつの方程式で問題を解くというようなイメージ、行き着く先は「統一理論で宇宙を理解する」というようなことがイメージされるような、そういう決定論の世界にいたわけなんですけれども、いっぽうで、社会科学の中でもマルクス主義がやはり進歩的な人たちを捉えていた思想であって、そこでもやっぱりある種の決定

論、これはまあ、そういうふうな理解はよくないということをだんだんに学びますけれども、基本的によくしていた考え方というのは非常に決定論的であった。そういう左翼的な考え方も含めて、やはり主体を重んじる、生きているものが自分で何かをやることの価値を強調するような物の考え方というのが、私をたぶん捕えたんだと思うんです。それはまた、右翼の考え方でもありまして、当時、林房雄という作家が、『大東亜戦争肯定論』というのを出して、僕なんかそれを読んで、「うん、なるほど、なるほど」と思いました。そこでは決定論というよりも、逆に人物が主体で世界を動かすみたいな世界観の中で物を考えていたわけで、そういう意味では決定論批判と主体性の議論というのは、それだけではないかなかなか先に進めない選択であったような気がします。

そういう中で大学院に入ってからだと思うのですが、そこはちょっと記憶がさだかでないんですけど、サルトルの『実存主義とは何か』という人文書院からでていた、当時の学生は誰でも読んだんじゃないかと思う本を、少し遅れて私も読んだのです。人間が生きるの意味に強い関心を注がせる本であったし、まあ、そうだから読んだわけですが、その中に「人間は自由の刑に処せられている」という言葉がありました。人間は誰のせいにもできなくて、何かに決定づけられているという事はない。しかし、決定づけられているという。まあ、禅問答みたいなことになるんですけども、決定づけられている中ですべての自由は自分に委ねられている。だから、何をしてもその責任は自分にあるし、しかし、自分にやれることは、すでにまわりによって決定づけられている。そういう中で自分は「自由の刑」という非常に厳しい刑に処せられているんだという考え方です。これはサルトルにとってもまだ初期の思想でありまして、もう少し思想は全体化していくんですが、とにかく、私がサルトルに感銘を受けたのは「制約された中での選択であって、しかし、その選択は実はなんでもありなんだ。すべては自分の責任で行われていて、結果もすべて自分に返ってくる」という考え方であったわけです。

## ● 当時、パートランド・ラッセルの『教育論』に関心を持って読んでいました。・・・その考え方に感銘を受けていました。

先ほどの紹介の中で山口幸夫君の話がでたんですけど、彼はあまりサルトルを読んでいたとは思わないのですが、科学技術者の生き方というのが、当時世の中に受け入れられていたようなものではない生き方を選択しなくてはならないというような漠然とした話を、山口幸夫君と共有していたのです。二人とも大学院に行ったんですが、大学院を出てからどうするかということ話し合った時に、当時、パートランド・ラッセルの『教育論』を私は非常に興味を持って読んでいまして、まあ、なんでも読んでいた中のひとつといえばそうなんですが、ラッセルはラッセルで非常に明晰で、ある意味ではサルトルの大掴みなところではない西洋的教養のひとつの代表だったと思うんです。その考え方に非常に感銘を受けていました。そして、その点についていろいろと山口君と話をしていました。パー

トランド・ラッセルの『教育論』の中に、ナースリースクールというイギリスの教育でいくつかの実践例があり、2歳くらいの年齢の低い幼児の教育がいかに大事かという話があります。いわゆる良家の子女がそういう教育を受けるのではなくて、広く一般市民社会の中でそういう教育を与えられることの意味みたいなものを強調しているのです。そういうところがラッセルの『教育論』の中であって、それで、行く先はよく分からないんだけど、また、科学技術者の分野とは少し違うんですが、まあ、ナースリースクールのようなものを作りあげるといような非常に大きなことを話し合いました、卒業してからは暫定的に別の分野で仕事をしながら、少しずつ準備をはじめていたということがあります。

## ● 当時社会が問いかけていた「知識人問題」を科学技術者として受け止め、自分の生き方を決めてゆこう。

そういういろんな試行錯誤の中で、この『ぶろじえ』というのが1969年の9月に創刊されました。直接のきっかけというのは、東大闘争をおいてないと言ってよいのですが、安田講堂事件が前年の1968年だったと思います。知識人問題というのが厳しく問われている中で、先ほどいったような漠然としたことを考えていて、自分達の考え方をきっちりさせようじゃないか、そうしなくてはならないということで『ぶろじえ』という同人雑誌を始めました。

お手元に配られている中で、雰囲気は感じ取っていただけたと思うのですが、2ページの終わり頃に状況をいろいろ書いているのを受けて、こう書いています。

「いま、すべての知識人はこの事態を真正面から見据えることから彼等の仕事を始めなければならない。惰性と化した彼等の倫理の根本を問いただし、人間の知識とは何であったかをもう一度問い直さなければならない。そのことはとりも直さず、知識人個人が自己の内部に向って「いかに生きるべきか」という切実なる問いを発することを意味している。とりわけ、高度に分化し専門化した科学技術分野に携わる知識人にとって、この問いかけは深刻である。現代の科学技術は「いかに生くべきか」の問いとは全く無縁のところ、精巧な世界を形造ってしまった。彼等はそれを無視するのではなく彼等個人の社会変革の意思に統一しなければならないのである。そのとき彼等の遭遇する問題は彼等をこれまでになかった科学技術者へと変容させる可能性を孕んでいる」

ということで、まあ、科学技術否定ではなかった。科学的分析に対しての批判ではありましたが、決して否定ではなかった。否定できないほど科学が好きだったという側面もあるわけです。

「その変容を恐れない数人の科学技術者がここに『ぷろじえ』同人として集った。我々にとって物質の中で原子や電子の集合がいかにか光や音や電場や磁場と相互作用をするかということに興味をもつ人間と、我々の置かれている状態に心底から怒り、そこからの突破口を切り拓きたいと願う人間とは同じ一個の人間なのである。我々はこの統一性を守り貫きたい。現代においてこれを守るためには我々は闘わなければならない。そして闘いは我々をもっと大きな歴史の場に連れ出さずにはおかないだろう。我々の直面する問題は科学技術の領域を大きく越えて同じ人間性の回復を目指して立上った多くの人々との連帯をいやが上にも要求するだろう」

というようなことで、とりあえずは科学技術者という者に根拠をもった取り組みをするんだけど、それは我々をもっと大きな歴史の場に連れ出すだろうと考えていたし、そういう方向では、確固とした目標を持っていたという感じがします。

次の2行くらいのところに「ぷろじえ」という言葉の意味を書いてありますが、これはサルトルの『方法の問題』の弁証法的理性批判の序文に相当する部分の言葉で、「人間の実践とは、お望みなら限られた状況を基にして社会的可能性に向って人間を投出する投企と言ってもいい」ということです。その投企というのが「ぷろじえ」ということで、私たちはそれをとったわけです。その文の最後のほうに書いているんですが、

「今我々の頭の中には変革の原点としての教育の問題が極めて重要な位置をしめている。しかし、今はこのことについて多くを語るまい」

ということで、先ほど言ったような、教育という分野にチャレンジしてみたいということ、当時もここにこうして書くほど見据えていたということだったと思います。これも振り返ってみて、ああ、そうだったのかと自分でも思っているようなことなんです。

当時社会が問いかけていた「知識人問題」を科学技術者として受け止め、自分の生き方を決めてゆこう。そういう志をもって、『ぷろじえ』というのを始めて、そして教育というもの長い射程の中で念頭に置いていたというわけなんです。この『ぷろじえ』で展開していた物の考え方というのが、さきほどご紹介があった『抵抗の科学技術』にまとめられていると思います。

## ● 実証主義というのは本当に強い方法論であって、その強さが同時に限界を形成しているということなんだと思う。

私にとってのサルトル思想とはなんだったのかという問題に少し入り込んでみたいと思います。後期のサルトルの非常に大きな仕事というのは、弁証法的理性批判ということで、結局、途中で放り出してしまって、完結しないまま死んでしまうわけですが、翻訳は3巻

まで人文書院から出ています。日本語訳の第3巻では、非常に衰えを感じるというか、疲れているなあということを感じ、これは結局挫折するなあと私なんかも感じるくらい、非常に困難を極める仕事を彼はしたと思っています。ただ、私にとってはものすごく魅力的で、しかしやはり難解でして、人の助けを借りなくてはとても読めなかったと思っています。その時に非常に役に立ったのが竹内芳郎さんの解説で、これ自身が彼自身のサルトル入門であるということで、サルトルの読み方は決してこれひとつではないだろうというようなことが書いてありますが、とにかく、サルトルとマルクス主義というテーマで、この『弁証法的理性批判』で彼サルトルが展開しようとしている「考え方」が解説してありました。それから、翻訳をした平井啓之さんも竹内さんと共に解説をしています。そのようなことを通して、少しずつ整理をしたというようなことです。

私の関心から言うと、実証主義というのは本当に強い方法論であって、その強さが同時に限界を形成しているということなんだと思うのですが、ありのままの現実、科学技術でいえば観測された事象というものであって、それをそのまま理解するという作業は極めて複雑なので、まずは現実を構成している要素をとりだす「要素化」という作業をします。物理で言うと、原子であり、さらに小さい素粒子です。いろんな分野でそれなりの方法でもって、ある出発点となる要素を想定する。そういう段階があって、その要素の再構成によって全体に近づいてゆく。それで観測したものが再現されればそれでよしとするということで、要素の抽出とそれを組み立てるための理論、つまりそれが総合されてゆくための理論というようなものによって再現性を確保する。誰がやっても要素を取り出して、このやり方でやれば同じ結果が得られるということです。その方法論を「実証主義」というんですが、その実証主義は非常に強力な方法であって、それはそれとして私が決して否定するものではなくて、重要な方法的アプローチだと考えたわけです。しかし、個別の要素で組み立てた全体が、いつのまにか、これが現実だ、これが全体だと考えてしまうという落とし穴があります。要素にできにくいものは捨ててゆく、捨ててゆくものは全体の中で大きな意味を持たない、そういう社会を考えた時に計画可能な方法論を提供するわけですが、非常に多くのものを切り捨ててゆくという仕組みになるわけです。個別化されたものが全体を形成するんだけど、形成されるべき現実の全体というのは当然、切り捨てたものも含めたものです。つまり、個別化したものを再構成した全体ではない、もっといろんなものを含んだ全体であって、それが自分のところに返ってくるわけです。そこで、方法論的に実証主義というか分析的理性というものは、自分が構成した全体からはみ出したものをできるだけ体系の中に位置づけてゆく、補正をしてゆくという考え方になってゆくわけです。

## ● 実践というものが全体を絶えず個別の中に投影する回路になっている。

それに対して、そうではなくて、これは科学技術の方法と社会問題を扱う時の方法とが



そこで非常に分かりにくく接合する部分なんです、部分化していったものがたえず全体を反映していることのほうが多いんですね。振り払おうとしても無理がある。したがって、個別に反映している全体というものが、実は本当の個別なんだということを見なくてはならない。彼はそれを非常にいい言葉で言っていて、この世の中を見る時に、それを「実践的惰性態」という言葉で理解をしようとしています。非常によく出来た言葉だと思うんですけど、部分というのはいつも全体を反映している。このことを認識するのは、現実世界と関わった時にはじめてそれが出てくる。現実世界に関わるというのが実践ということなんですけれど、実践というものを通すと、部分というものは、歴史や世界に水平にも垂直にもそこに至っているいろんなものがたえず絡んでくる。何か実践をするということは、たえず部分を全体化する。部分が全体を反映したものであるという事実が、現実世界が、いやおうなく自分に跳ね返ってくる。そうすると、現実世界というのは惰性態となる。つまり、思うとおりにならない。想定した何かを実践すると、想定したものにはならなくて、必ず歴史を反映する。あるいは世界を反映する。そして思うとおりにならないという認識が「実践的惰性態」という言葉で表されていて、全体というのは誰にも見えないものなのだけれども、しかし、部分の中に全体が反映されているというものを通して全体を感知する。そういうものだということです。したがって科学技術が扱うものというものはあくまでも部分が全体を反映させない、それで反映させる時には補正によって反映させるという方法論によって物事にせまってゆく。そのことによって、先ほど言ったように誰がやっても同じ結果に到達するという非常に強い結果を得ることができる、というような関係が成り立つのだと思います。

実践というものが非常に大事だということを「サルトル哲学」では自ずと強調しています。その実践の捉え方、ふくらみというものを当時の私は浅い見聞で理解をしていた、というそしりは免れないとは思いますが、左翼は — まあ、私も左翼と言われたのですが —、実践を重んじたわけです。しかし実践とは何かということについては、歴史をなぞるのが実践であるかのような捉え方というのがいっばうにあって、そうではないというマルクス主義的な、というか、マルクス主義の当時の理解で広く私が接していたものによれば、アメリカ社会学であるとか、当時、未来学という言葉でいわれた予測科学のような新しい分野がでてきたのですが、そういう科学に対する接し方が非常に偏っていた。方法論としての部分性をきっちりと批判したうえで、サルトルはそういう近代諸科学が提起している問題は学びに値する、十分それを取り入れる価値があるというスタンスをあちこちで出しています。それに私は非常に共感を覚えました。新しい社会の近代諸科学を大きな実践のサイクルの中に吸収することのできるような哲学の体系を、サルトルは一生懸命定義しようとしている。その時に平板な意味ではなく、実践というものが全体を絶えず個別の中に投影する回路になっている。ということで、「ぶろじえ」という言葉の意味もそういう文脈で再構成されてゆくと思いますが、その時に「実践的惰性態」というのがキーワードになっているというふうに私は受け止めていきました。

● **ここはやっぱり市民が登場すべきじゃないかということで、「ただの市民が戦車と止める会」を作りました。**

そういうふうに、ものの考え方の世界で格闘をしながら、相模原の戦車闘争が始まります。『ぷろじえ』は 10 号で終るんですが、8 号でしばらく止まってしまいます。それは相模原の戦車闘争が始まったという結果でありまして、そういう意味でいろいろ書いてきたり言ったりしてきたことが実践と名のつくことに取り組んだ、つまり相模原の戦車闘争に立ち上がったということによって試されるという段階があったんだと思います。しかし、当時は試されるという問題意識というよりも、むしろ科学技術者の生き方として、今、目の前で展開をしている戦車闘争に沈黙を保っていいのかと自問自答で自ずと飛び込んでいったということだったと思います。

戦車闘争のことを少しご説明したいと思いますが、さきほどの教育を長い射程において取り組みをしようと考えた時に、最初は山口君と一緒に町工場を始めて、町工場で事業をしながら、だんだんとナースリースクールのようなものを作ってゆくという、まあ非常に長い射程のことを考えていました。それで、まずやったのは相模原に小さな土地を買ったんですね。二人でお金を出し合って。話せばいろいろとあるんですが、まあ、比較的安い土地を買ったんです。その土地というのが、米軍相模補給廠の隣りだったのです。目の前が米軍相模補給廠だった。偶然と言えば偶然なんですけど、そこに小さな工作所を作って、古い旋盤やボール板を買い込んで、古い機械で物を作れるような状態にして、ちょっと傍らで生活できるようにして、生活をしておりました。そのすぐ前に米陸軍基地の野積場が広がっていて、ベトナム戦争で壊れた戦闘車両が当時は 500 台くらいずらーっと積まれていました。越してきた当時はそんなになかったんですが、どんどん増えてきて、そこで日本の基地従業員が戦車を修理して、またベトナムに送り出すという、「ベトナムと直結した場所」だったわけです。

その戦車闘争が始まるきっかけというのは、当時の横浜市長の飛鳥田一雄が — 彼は弁護士出身の政治家だったわけですが — トレーラーに載せられた戦車が基地を出てしばらくは相模原市道を走り、それから国道 16 号線に出て、途中で横浜市に入って、横浜市が管轄する村雨橋という橋を通過してノースピアという米軍基地まで輸送されていたのですが、道路交通法で村雨橋の重量制限、— がたしか 40 トンだったと思うのですが — トレーラーの重量はそれを超える、つまり道路交通違反だということを飛鳥田さんは掴んだのです。そこで、当時労働組合員であった青年達が村雨橋の前で座り込みをした。戦車は人の目に触れないように深夜に輸送されていたのですが、それを座り込んでトレーラーを止めて、戦車が白日の下に曝されるという状態を作ったわけです。法律は阻止する側に味方してくれて、その作戦はもの見事に成功して、戦車は逆戻りしてもう一度相模原の基地の中に戻らざるをえなくなったんです。それが 1971 年 5 月のことです。

それで、勢いづいて当時のベトナム反戦運動をやっていたすべての勢力が、この戦車を二度と基地から出さないで、戦車を止めることによって直接ベトナムの解放運動に連帯、支援しようということになったのです。これは抽象的な支援ではなくて、物質を止めるというような形をとることができる運動でしたから、人々はそれを非常に分かりやすい運動として捉えたと思います。いつのまにか相模原補給廠の西門 — そこから戦車が出てくるのですが — の前にテント村ができて、監視をして、もし出てくればそれをまた止めるという態勢ができたんです。少数の人たちが徹夜で監視をして、いざとなれば座り込みをするというようなテント村で、当時、「やじうま」と言われた市民が、夏場になって、夕涼みで一杯引っかけたような人も含めてたくさんテント村を訪れて、非常に賑わいがありました。「テント村解放区」といわれた空間が当時、できていたわけです。

しかし、市民は「やじうま」という存在でしかなかったんですね。労働組合の人とか新左翼の人とか政党の人たちでたくさんのテントが維持されていたんですが、実際に周辺の市民の参加はなかったのです。私は目の前でそれを見ていながら、自分自身が当事者にならない、なっていないということについて非常に忸怩たる思いで毎日それを見ているという期間がありました。それで山口君と話をして、ここはやっぱり市民が登場すべきじゃないかということで、「ただの市民が戦車と止める会」というものを作りました。それが 72 年の 7 月でした。それで、実際の行動が始まるんですね。市民としてコアになったのは 2 家族で、あとはそこにわれわれがいることによって集まってくる人たちが繋がっていくということで、ほんとに今思うとなつかしい人たちがいっぱい集って「ただの市民が戦車を止める会」という会を軸にした毎日が始まりました。

## ● 「実践的惰性態」の中でひとつの目的をもって「ぷろじえ」をした時、やはり現実の世界がのしかかってくるわけです。

それで少しサルトル思想との交錯の話をするんですが、運動を始めると何もかもが運動に引きずられてゆくわけです。当時、「日常性」という言葉を全共闘などは「唾棄する日常性」というふうに言っていたわけなんですけど、運動は運動で日常性なんですね。間を埋めないといけないことが 9 割くらいあったんです。実践的惰性態とのやりとりですよ。警察と交渉するとか、市長に申し入れをするとか、あるいはテント村に集まっている運動家たちと接点を作るとか、そういうことを日常的にまわすためには車の手配をどうするかとか、みんな勤めのある人たちですし、私自身もまだ勤めておりましたから、日常のサイクルを運営していかなければならない。「実践的惰性態」というものの中でひとつのある目的をもって「ぷろじえ」をした時にやはり現実の世界がのしかかってくるわけです。何をしようとしているかということと日々しなくてはいけないことが統一しているようで統一していない。当時の流行で言う「引き裂かれ」という状態が発生してゆくわけです。それはどういう世界に入ってもそうだと思うんですが、続けてゆくには考え方を鍛えてゆくこと、

つまり持続のためには思想が必要で、私にとってはサルトルの思想がひとつの持続のエネルギーになっていたと思います。それと同時に時代が非常に味方をしていたと思うのです。「歴史全体が動く」という感覚が当時は非常にありました。今でももちろんあるというふうに私は思っておりますが、当時はとりわけいろんなところでいろんな運動が起こってましたし、世界中で歴史が動いているという感覚があったと思います。そういう「解放闘争」というものと自分達とが連帯をしている、繋がっているという感覚がいっぽうでは非常に助けになっていたと思います。

1972年に始まって、ベトナムの終戦のパリ協定が1975年ですから、反戦運動という側面では3年間ほど相模補給廠を中心としていろんな運動をし、忙殺されている中で過ぎたわけです。そんな中でベトナムから来ていた留学生がわれわれのテント村を訪問してくれて感謝の言葉を述べる、というようなベトナムの留学生との交流があったり、当然のことながら、沖縄、横田、横須賀などベトナム戦争と関わっている基地に反対をしている運動とは深い関係ができるというように、国内の反基地運動と非常に深いつながりができました。そういう意味では人脈的な関係が広がっていったわけです。

## ● 科学技術者としてこういう問題にどういふふうに関わりができるかのお手本がアメリカの中にあった。

同時にもう一度『ぷろじえ』に戻ります。ちょっとスタイルを変えて『ぷろじえ』を出すことも始まったわけです。ナンバー9とナンバー10が新しくなった『ぷろじえ』であったのです。それを振り返って見ると、戦車闘争がもたらしたひとつの変化なのですが、英文の目次がつくんですね。全共闘運動の思想が非常に色濃く反映している部分と科学技術論の部分があり、なかなか英語にしにくい取り組みをしていたわけですが、それでもなぜ英語にしようとしたかという、この戦車闘争の中で海外の科学技術者と接触が始まっていたのです。当時アメリカで「セспа」という科学技術者の研究グループがありました。セспаが中心となってアメリカにおけるベトナム反戦運動での科学技術者の関わりというようなことを、戦車闘争の中で、そんなに深くはなかったのですが、生まれてきていて、その連中と意見交換をすることが将来必要だということが出てきていた。それで英語の目次をつけ始めたのです。ひとつの大きな要素として、ダニエル・エルスバーグがペンタゴンの内部文書を暴露して、いかに汚い戦争かということをも明らかにし、それが表に出たのです。「朝日ジャーナル」が全訳をした別冊を出しました。

それはある意味では新しいインパクトでありました。エルスバーグはペンタゴンのリサーチャーであり、政策立案にも携わっていて、彼自身は自然科学ではないと思いますが、とにかくインテリで、彼が暴露した文書の中に「ジェイソン」というシンクタンクがやったベトナム戦争を終結させるためのいろんな提案の文章があったんです。アメリカのセспаの人たちがジェイソンに関わった科学技術者たちを批判するという非常に激しい科

学技術者批判運動をやっている、そういう文献も知るようになりました。私としては科学技術者としてこういう問題にどういうふうに具体的な関わりができるかということのお手本のひとつがアメリカの中にあった。振り返ってみれば大きな意味を持っていたというふうに思っています。このジェイソン批判ということ、『ぷろじえ』としても相当力をいれてやりまして、最後の号には、セスパだけではないんですが、アメリカの人たちがジェイソンに関わった科学技術者を糾弾するために作った文章、それに対する反論の文章などの翻訳資料で1号を作ったのです。

ジェイソンに関わった人たちというのはそうそうたる科学技術者たちでした。ハト派の人たちもたくさん含まれていて、誰がどう貢献したかということは結局はそんなに詳しくは分からないんですけれど、関わったという意味ではハンス・ベータがいたり、それからガーウン、今は核兵器を反対する立場でものを言っているんですけど、当時のマンハッタン計画の中では推進派だった科学技術者です。そういうそうそうたる人たちがベトナム戦争から早くアメリカが撤退できるように電子戦場というのを考えたんです。エレクトロニック・バトル・フィールド (electronic battle field) と言います。センサーでベトコンを検出して、それと直結した飛行機でゲリラを叩く。スマート爆弾と当時言っていた爆弾でピンポイントに叩く。北と南の間に電磁障壁を作って、北の南への侵攻を阻止する。そのことによって北爆をしなくても済むようにする。というような、撤退を助けるための無人戦争システムで、オートメーション・バトル・フィールドみたいなものを提案したわけです。そういう考え方が私たちにとってみればまさに実証主義の落とし穴を体言しているということで、ジェイソン批判というのは、相模原闘争の後で『ぷろじえ』が取り組んだ大きな仕事だったと思います。

## ● ベトナム戦争に反対する運動というのは必然的に同質の開放運動と接点を作るということにならざるをえない。

少し先を急ぎたいと思います。実践的惰性態ということと重なっていくんですが、ベトナム戦争に反対する運動というのは必然的に同質の開放運動と接点を作るということにならざるをえない。もちろん選択は瞬間にはあるわけですが、ほとんど選択の余地がないと思われるほど大きな流れの中で日韓連帯運動が始まりますし、フィリピンの反マルコス運動とのつながりも始まります。日韓連帯運動というのは、これは私が横浜に移り住むきっかけでもあったので、少しご説明したいと思います。民団神奈川不法占拠事件というのがありました。これは1976年の3月1日です。3月1日というのは韓国の人たちにとっては、サン・イル万世運動、3・1運動という大きな記念日で、何をするにもよく使われる記念日でありました。当時の韓国では朴政権の軍事独裁政権が長く政権についていたんですが、朴政権のひとつの政策として、民団を朴派の独裁を支持する組織にするということがありました。日本は重要な拠点でしたから、そういう政策をとっていたわけです。とこ

ろが、　　そう言う中で韓国民主化運動に同調しようという在日韓国人が自分達の民団を民主派で維持しようとして立上がった。それが東京の民団と神奈川の民団です。われわれは民主派民団と呼んでいたのですが、3月1日に朴派の人たちが民団神奈川を占拠して、民団事務所の所有権を朴派がとってしまうという暴挙にでたわけです。それで、民主派民団を守ろうということで、しかし、居留民団の内部対立ですから、日本人である私たちが直接何かできるというわけではないけれども、少なくとも日本の政府が朴派民団に味方をして、その不法占拠を助けるということがあってはならないということで、日本の公権力が介入しないように監視をする。こういうことで当時いろんな意味で運動をしていた人たちが「民主派民団を支える会」を作る活動を始めたわけです。相模原の運動では、戦車の一部が韓国に送られていることがすでに明らかになっていまして、韓国の独裁政権と民主派という韓国内の流れには深く関心を持っておりましたので、そういう流れの中で当然、民団神奈川不法占拠運動に対しても深く関与することになってゆきます。その結果、日韓連帯神奈川民衆会議という運動体が作られることになり、日本の代表を私がするという事になりました。

そんな中で金大中さんの救出運動ということもありました。あれは1973年8月6日でした。金大中さんの問題ももちろん並行して行っていて、彼が軍事法廷で死刑判決を受けたのが80年9月17日なんです、その日外務省の前で「日本政府が現状回復をしないが故に彼の死刑判決の現実がある」と抗議活動をしていたんです。その時に私は逮捕されました。結局は起訴されなかったから数日間出てきたんですが、そういうことがありました。その年、逮捕の前にはすでに僕は仕事を辞めていたんです。同じ年なので、よく逮捕が原因で辞めたのかと言われるんですが、そうではないんです。

- **グラスルートの運動とグラスルートの中で活動しているインテレクチュアルのやっている運動が深く結びついていて、それが同時にメディアや政治に対して発進力を持っている。**

さて、それでこの辺で少し整理を進めたいと思います。さきほどのジェイソン批判があるひとつの現れだったと思うんですが、より深く欧米の反戦運動と反核運動に接するようになりました。その大きなきっかけは1982年だったと思うんです。ヨーロッパで反核運動がおこります。それは単なる反核運動というより、ひとつの文化闘争であったと思います。フェミニズムの運動があったり、東ヨーロッパの民主化運動とヨーロッパの運動が結びつくような、冷戦終結に向うヨーロッパのいろんな思想運動を含んだ、欧米の反核運動に接するようになります。ヨーロッパでは中距離弾道弾の配備中止を求めるということが非常に大きなテーマだったわけですが、その運動が太平洋にも普及をするという恰好で、1983～4年頃に太平洋でも中距離核を阻止するという国際的な運動を起こそうという呼び

かけがありました。日本では反トマホーク全国運動というのが 83 年だったと思いますが、始まりまして、全国の基地運動とのつながりがすでに 10 年ほど続いていた中で、私とその代表的な役割をするようになりました。

トマホークというのは海洋発射巡航ミサイルで、これはヨーロッパで問題にされていた地上発射の弾道弾ミサイルの海洋版なんですね。そういう意味でヨーロッパで阻止闘争が正当化されるとすれば、太平洋においても巡航ミサイルトマホークの配備というのは同じような論理で阻止されないといけないというのが、自明の流れだったと思います。ハワイに拠点を置いておりました AFSC (America Friend Service Committee)、これはクエーカーを母体とする平和運動体ですが、その組織のネルソン・フォスターという男が「巡航ミサイルを反対する運動をやるとすれば日本こそが中心でなければならぬ」と言うんです。巡航ミサイルの飛距離は 250 キロくらいなんですね。なぜ海洋配備するかというとソ連の太平洋岸の基地を攻撃する。ソ連、北朝鮮、中国というような西側陣営を射程にいれたような配備をするわけです。それで 250 キロとなると、ちょうど日本近辺で使われるということになります。当然、米軍基地は日本を拠点にするという動きがあったわけで、ネルソン・フォスターはこの運動は日本を拠点にするべきだと考えて、日本を行脚したんです。どこかにいい仲間がないかということで、あてもなく行脚をしたようです。

反トマ全国運動の会をたしか名古屋で開こうとしていた時に、ネルソン・フォスターが日本に来るということを知って、ぜひわれわれのところに来てもらおうということになりました。彼自身もそこで、日本にこういう運動があったのかということで、現在もあるんですが PCDS という「還太平洋軍事撤廃運動」の国際的なネットワークが形成されます。当時の名称は「太平洋巡航ミサイル配備反対運動」だったんですが、日本、フィリピン、オーストラリア、ニュージーランド、フィジー、カナダ、アメリカという環太平洋の平和運動がネットワークして巡航ミサイルに反対する運動がはじまりました。それによって海外の平和運動、とりわけインタレクチャーというんですか、情報を扱ったりリサーチしたりするような人たちと自ずと交流するようになったわけです。そこで日本と非常に違うということでカルチャーショックを受けたんです。平和運動がやっているインタレクチャーな仕事、知的な仕事というものは、そこにオリジナリティーがあって、そこから議会に発信するし、メディアに発信するしということで、グラスルートの運動とグラスルートの中で活動しているインタレクチャーのやっている運動が太く結びついていて、それが同時にメディアや政治に対して発進力を持っている。それがやっぱり非常に大きなインパクトがありました。振り返ってみると、ダニエル・エルスバークというのも結局は背景があるからこそ彼の仕事がものすごく生きたんだと思うんですね。

特に核兵器反対運動に関して言えば、アメリカがどの軍艦に巡航ミサイル・トマホークを装備しようとしているのか、いつその船が日本にやってくるのかというような個別具体性をもった情報を正確に入手して、それを運動に役立てるということは不可欠な活動だったわけです。その活動がものすごくアグレッシブに行われているということを知りました。

われわれが作った PCDS という太平洋ネットワークにも 5 人くらい情報提供のプロがいて、プロと言っても決して権威的なものではなく、われわれと一緒に活動している人なのですが、しかしペンタゴンの情報に通じていたり、議会制度に通じていたり、プロフェッショナルな蓄積をもった人がついてくれるんです。その人たちからそのつど情報を得て、次の行動を考えるとというようなサイクルが可能であったのです。そういう関係は、私が『ぷろじえ』をやり始めた当時にはほとんど想像のつかなかった領域であったと思っています。

## ● 公文書というものをどう捉えるかが、わりと重要なことじゃないかな。

さきほど『情報公開法でとらえた在日米軍』の本をまわしてもらったと思いますが、これのあとがきに書いたんですけれど、ウィリアム・アーキングという人がいます。この人は今でも現役のコメンテーターで、ロサンゼルスタイムズにもブログを持っていて、しょっちゅう情報を流している人ですが、彼はもとはグリーンピースにいたんです。反トマ全国運動の時に知り合って、彼のやっていた仕事はもちろんずっと前から知っていたのですが、彼のグリーンピースにいた時の方法論に直接接することができました。アメリカの情報公開法の制度を使って、たぶんアメリカ軍の誰よりももっともよく軍全体のことを知っている。軍組織というのは個別に分断する方法をとってしまっていて、ごく少数の人しか全体が分からないわけなんですけど、彼はグリーンピースの大きな部屋の壁一面に実に膨大な情報公開法で得たペンタゴンの資料が詰まっているというようなところで市民運動をやっているわけです。彼がやっていたような仕事というのは、サルトルはよく「全体」という言葉を使うのですが、全体を回復するための効率のよいチャンネルを彼が開拓をしている。それをひとつのシンクタンクにしている。そういう活動家はいろんなところにいます。まあ、その中でもウィリアム・アーキンはずば抜けた人ですけど、いろんなところでそれに類する人たちがいることを 1980 年のはじめの頃から 80 年代を通して知り合い、そういう人たちと深く交わるようになりました。

そんな中で日本の運動にもそういうものが是非とも必要だと感じるようになって、1980 年の半ば頃からそういうことに関心が傾いていったことがあります。今から振り返って見ると、教育の問題はどっかに行っちゃって、大きな新しい取り組みの流れの中で次の手がかりとして見えてきたのが情報公開というものだったと思います。これをもうちょっときっちり、大袈裟に言えば思想化する必要があることだろうと思っています。まだできていないのですが、漠然とはいろいろと考えている事があります。

そのことを少し申しあげたいんですが、ひとつは公文書というものをどう捉えるかということがわりと重要なことじゃないかなと思っています。ここでいうのは歴史文書ではない公文書のことです。よくアメリカの情報公開で 70 年代の外交文書がでてきたとか、専門家があさって新しい発見することがあるわけですね。それはそれで大事だと思うのですが、私はどちらかと言うと生きている現実というものに関心があつた。現代史における、今生



きている世界における公文書が持っている独特の位置があるんじゃないかと思っています。アメリカの情報公開法というのは、最初、その法律を読んだ時には目からウロコの思いでした。あれは議員立法なんですね。アメリカはほとんど議員立法ですが、法律を作った時に、「情報公開法という法律を作ったから市民はそれを使え」ということで、市民向けのパンフレットというか説明書を作るんです。それを読んだ時、大きなショックを受けたほど実にいい文章だったのですが、要するに政府の持っているすべての情報はピープルのものである。人々のものである。行政を託している市民がたまたま政府に預けているものである。という具合に、政府の持っている情報はすべて市民のものであるという原理をはっきりと打ち出しているんです。そして、その情報なしに物事を考える市民というのは民主主義の基礎ができていないというような言い方をするくらいはっきりと書いてあるんですね。いっぽうでは行政はその情報を使って政治をすることを市民に託されている。だから、考え方としては、その情報を開示することによって自分達が託されている仕事がかううまく出来ない時には開示する必要がない。だから、市民にとっては公開の利益と公開しないことの利益は両方ともが市民の利益だということです。それで、市民に託されている情報を市民に提供するというのと、市民が託している行政が公開することがかううまくできなくなって仕事がかどらないという2つのどちらを重く見るかということで、公開か非公開かが決まる。基本的にはこういう考え方です。

となると、軍は当然非公開する利益を主張するわけですが、市民の側は公開する利益を強調して、そのふたつがたえず争って、だんだんと自分達が公開したほうが利益になるという領域を拡大してゆく。そういうプロセスが一応、理論的には保証されているシステムになっています。ただ、もちろん、そうはうまく行っていないことがアメリカを見れば分かるわけで、政権ごとに違っていて、基本的には民主党政権は公開する動きが強いし、共和党政権は政府の言うことを聞けという理論が強くて、そんなに簡単なことではないんですが、いずれにしても争うところの土台は一応フェアに出来ているという感じを私は持っているわけです。

## ● 日本は遅れているということでは済まなくて、どうやったら風土を変えることができるかということを考えるべきだ。

現在進行中の行政の事柄に対して、お役所の仕事の傍らにある情報を自分達も見るということは非常に大きい意味があると思います。そのことが歴史を変えるし、全体を見る目を変えてゆくと強く信じるようになりました。そこをどんどんこじ開けてゆくという闘争がすごく大事ではないかと思っています。

それで一念発起して取り掛かったのが、ピースデポを作ろうということでありました。1990年12月に、当時は平和資料協同組合と言っていて、ニックネームがピースデポだったのですが、今では逆になっています。とにかく現在進行中の公的文書の開示を迫り、その

領域を広げることによって、より民主化を全体化する。それは日本の民主化だけではなくて、グローバルに非常に大きな意味を持っている。実際に反トマ全国運動では私たちはそういう恩恵を被りましたし、日本でそれが進めば、アジアの人たちはものすごく恩恵を被ることになる。同時代で政治に波及してゆくはずだと思うんです。そういうふうに取り組む態勢が日本にはない。なによりも専従者がいないとできない。僕はそのことを労働組合の人たちにも説いたことがあるんです。とにかく専従者は1人か2人でいい。こういうことをするプロフェッショナルな専従を抱えるというような考え方ができないかというような話を結構したと思うんですが、あまりピンと理解してもらえなかった。今でもピースデポの経営の困難さを考えると、なぜこういうことがもっと楽にできるようにならないのかと思うくらい、こういう意味がまだよく伝わっていないという思いがあります。いずれにしても実績を見せないといけないということで、90年代に準備委員会を立ち上げて97年に正式に発足をするまでにこぎつけました。その間、日本の情報公開制度というのがまだなかったもので、アメリカの情報公開制度で在日米軍を調べることに取り組んで、先ほどの紹介にもありましたように2冊の本ができたのです。これは非常に骨の折れる膨大な作業でした。これはやり続けることが必要だと思うんですが、もっとスタッフがいないと続かないというのが実感としてあります。

ヨーロッパでもそうですが、情報公開制度が最も進んでいるのがアメリカで、イギリスは日本より悪いとイギリスの人は言うんですけど、本当かなあと思います。そもそも土台が違うような気がしています。どの国もまだアメリカほどではないと言えらると思います。アメリカの情報公開制度はそれなりに進んでいて、まだまだ日本はやるいろいろなことがあるというのが現状だと思います。

情報公開を請求している中で、先ほどウィリアム・アーキンの話を致しましたけれども、日本でこのことを実行しようと考えた時に、やはり非常に風土が違う。民主主義の風土が違う、そのギャップをどうするかという課題が常につきまとっていて、これはこれで一筋縄ではいかないような大きな課題だと思っています。ただ、こういう課題は努力をして、そこを開拓してゆく。それこそ闘争ですよ。闘争なしには前に進まないと思うんです。日本は遅れているということでは済まなくて、どうやったら風土を変えることができるかということを考えるべきだと思っています。チャレンジするのに、今からでも遅くない。なんとかチャレンジする人がでてこないかなあと思っている次第です。

風土の中で一番大きなところは、平和運動の中ですら「お上」というものと自分との関係がやはり民主化されていないということです。非常に根は深いと思うのですが、コミュニティーというか市民社会という考え方そのものがまだ日本では根づいていないのです。ですから、権力を持っている情報が自分達に起因しているんだということが、別に「喧嘩せよ」と言うわけではなく、気負ってどうこうと言うのでもなく、当然のこととして、「自分達の情報をお前達が持っているのだからそれは見せて当然だ」という風土を作りあげるところから運動を起していかないといけないと思っています。

## ● またいで越える —— いろんな分野（フィールド）をトランスすること

サルトルの話から情報公開のことになっているのですが、最近、「際」という字に非常に興味をもっているんです。ちょっと飛躍した話で恐縮ですが、生嚙りで間違っているかもしれないので、間違っていたら教えてほしいのですけれど、漢和辞典を見ると、コザト偏は横にすると山だというのは、山はそびえて高いものですが、もともとコザト偏は丘だということです。岐阜の「阜」と同じで村という意味ですね、コザト偏に祭りと書く「際」というのは、遮るものがある村があってそこに人が集まるということからできている字のようなんです。そこで、サルトルの言う全体化という思想にこだわっているのですが、全体化というのはいつかは達成できるようなものではなくて、いつまで経っても全体化なんです。全体に近づいてゆく。でも、全体も変わってゆくから、いつまで経ってもそれは追っかけっこになるわけです。

全体化を求めるいろんな試みの中で、地球的にはやはり解放闘争だと思うんですね。今、世界でいうと1%の人が世界の富の40%を持っている状況をどうやって克服していくかというようなことを含むような全体化だと思っているのですが、その全体化を目指す時に必ずこの「際」というものが出てくる。隙間がある。ある領域と領域の間に空白がある。そこを埋めてゆくという働きが必ず出てくる。学問の上でもインターディシプリナリーと言ったり、インターナショナルと言ったり、日本語では学際と言ったり、国際と言ったり、間を埋める試みを人間はどんどんやっていると思うんです。

私がすごくこだわってきたのは、ある意味では「際」をどうやって効率よくということちょっと言葉は悪いですが、どうやって切り込むと重大な「際」が拓けてゆくかということだと思っんです。ただ、この言葉をどういうふうに訳したらいいか。どうもこれは「インター」という言葉ではないんじゃないかと思っんです。実務と実践の間にも必要ですし、グラスルーツの中にもその間を埋めるようなものが必要ですし、「インター」と言うとしても同質のものを繋ぐという感じがあって、そうではなくて、日本語にするとどういったらいいのかわからないのですが、英語では「トランス」ではないかと思っんです。要するに「またいで超える」。またいで超えるような実践です。ある学問領域をまたぐというようなことだけではなくて、生き方や身の置き方などにもいろんな間があって、そういうところに「どっかりと領域を据え、そして、かき回しの作業をする」というか……。すでにトランス・ナショナルという言葉はあるんです。そこでトランス・フィールドというように、要するにいろんな分野（フィールド）をトランスするということ。私はどうしても知的活動の領域が活きるという道を探ろうとするんですが、それは別にいろんなやり方があると思っんです。インター・フィールドではなく、トランス・フィールドとしてチャレンジをすることが非常に重要じゃないかなあと思っんです。そういう時にこの情報公開というものが、「トランス」の触媒として非常に重要な役割をしそうな気がするんです。

● **情報公開の問題を私は真剣に考えたいし、そのことによってこそ結果が得られたということを見せることができるようなチャレンジをしてみたい。**

実際、情報公開でやると実におもしろい領域がたくさん出てきて、ひとつの学問分野ではとてもカバーできるようなものではないと思うんです。例えば日米安保の新ガイドラインができて、日米の安保の再定義をされた時にアメリカの国務省の公文書の公開を請求したことがあるんです。そうすると日本のアメリカ大使館とアメリカ国務省との間の日米交渉に関わる往復文書とか電文とかが出てくるんですけど、それを見ると単に日米安保に関して「実際に何が起こったのか」ということを暴露するというような関心事ではなくて、アメリカが日本をどういうふうに見ているかということが「ぼろっ」と見えることがある。他のイシューとの絡みでその問題を論じているというような局面が出てくるわけです。たとえば農業問題を議論するのと安保問題を議論するのが同じ言文のやりとりで行われているような時、その2つの問題がバーターされちゃうんですね。つまり、農業交渉のほうの本質的な議論を踏まえてみないと、その文書が実際にどういう意味を持っていて何が大事かということのひとつの分野だけでは見落としてしまうし、誤ったことを言うかもしれないというような局面にでくわすのです。そうすると、どうしても必要に応じて、その時のいろんな分野の経過を勉強し直したり、読み直ししないと、ひとつの分野がうまく解けないということになるんです。

そういう現実でくわすと、いろんな回り道を経ながら間を埋めるという作業をしないといけないわけで、それはそれで非常におもしろいし、インパクトのある、実際に政治を動かす影響力のある結論を導く事も可能になる。そういう類のことがたくさんあると思っています。ですから、この情報公開という問題を私はもう一度ちゃんと真剣に考えたいし、そのことによってこそ結果が得られたということを見せることができるようなチャレンジをしてみたいなと思います。ただ、もう年なんで、どこまでできるかということはあるんですが、そろそろ勝手にもう一度やらせてもらってもいいんじゃないかとピースデポの人たちには言っています。

なんだかとりとめもない話になりました。もう少し自分で考えなくてはならないことがたくさんあるんですけど、とりあえず、今の段階でのことがみなさまに伝われば嬉しいと思います。

## 《全体討論》

**猪野修治**：梅林さんがどういう人が参加しているのか知りたいと言うことですので、ひとりひとり1分くらいで自己紹介をしていただけますか？あまり簡単でなく、しかも長くなく、ちゃんと本質について分かるように。では、よろしくお願ひします。

**李 吟京**：立教大学で政治学の博士課程で勉強しています李吟京と申します。今、米軍基地に関連して日韓の運動や日本の平和運動に関してやっているんで、梅林さんと猪野さんには去年からいろいろお世話になっていて、今日、ここまで来ることにしました。よろしくお願いします。

**藤澤完治**：藤沢と言います。大学を出てすぐ企業に入り、今は中小企業の経営の端くれみたいなことをやっております。大学時代にいろんな本を読んだりして、その中にマルクスの「世界を変えるのが大切で解釈するのはダメだ」というような文章がありました。世界は解釈するのではなく変革するものであると。これは屁理屈を言っているより、ゲバ棒を持ってデモに行かないといけないんじゃないかというふうに思ってやったことを今思い出していました。けれども、企業に入っているいろいろと考えると、マルクスがあんな簡単なことをいう訳ないという気がしました。まあ、いろいろと話せば長いんですが、ひとつだけ。ごく最近、石牟礼道子さんという水俣病の人が書かれた『苦海浄土』という本に出会いました。また『水俣学講義』という本が第3巻まで出ていまして、それを読みました。今、先生が話されたような「部分が全体を反映する」というような観点から、熊本大学やら他の大学でいろんな人の講義をやっている、その講義録を読みますと、ああ素晴らしいなあと思います。これは昭和30年代からやっていて、私も驚いたのですが、その中で文化人類学者の方が書いているんですが、文化人類学というのはご存知のように、未開の土地などに行って、そこの土着の人にヒヤリングをするんですが、それで水俣病の患者にいろんな話をするんだけどほとんど通じない。同じ日本人でありながら。これは学問のやり方が悪いんだろうというようなことが書いてありました。その時に思ったのは、人間は自分以外の他人を知るのとはものすごく難しいと言うことです。胸を開いて話をしてくれるとか、そういう次元とは全然違って、その人が育った環境とか病気だとかをいろんなものをいくらヒヤリングしようとしても難しい。自分の世界と他人の世界を一緒にしようとしてもなかなかそうはならないんじゃないかということが書いてありました。それから、科学者や医学者の反省として、原因究明にものすごく時間がかかったということ。その間に病気がどんどん広がってしまったということを非常に反省していると書いてありました。原因はたぶんチツソからでてきたものに決まっているから、停止命令を先に出せばよかったです。それができない。やはり原因をずーっと解明して、とうとう水銀と分かっただけからはじめてアクションを起す。これは科学のジレンマだと思うんですが、私も読んでいて「なるほどなあ」と思いました。こういう話を後で時間があれば、お聞きしたいと思えます。

**井野博満**：井野と申します。私は梅林さんとは大学で同級生で、その時から知っています。大学生や大学院生の頃は自分のほうが少し先の活動の場を歩いていたような気がするんですが、僕は『ぷろじえ』を読んだ時に非常に衝撃を受けました。ああ、この人はこういう考え方でやっていたんだなと思って、さっきの話だと東大闘争がこの思想と関係しているとおっしゃったけれど、この辺りのことをもう少し知りたいという気がします。その前に

山口さんと一緒に「枯木陶」という名前で書かれた本を読んだ時には、近代主義的な発想から出てきたものだと思っていたのですが、この『ぷろじえ』が出てきて、サルトルの影響が出ているのかもしれませんが、その辺の飛躍ですね。梅林さんの考え方の飛躍について聞きたいと思います。それから、もうひとつは70年代のいろんな運動があったにも関わらず、今の科学技術の状況とか世界の状況が非常にひどい状況なわけですよね。それはわれわれの力が足りなかったということなのか、今の状況をどういうふうに捉えておられるのかということをお聞きしたいですね。それからもうひとつ、今どうも高度主義みたいな話になってきて、少しサルトルの評価がさがっていると思うのですが、梅林さんの今の時点でのサルトルの思想についての評価をお聞きしたいです。その後の思想の流れとの関係で聞いてみたいです。私は大学は去年退職しまして、今は非常勤としてやっています。

**猪野修治**：井野さんは物理学者でいらっしやいまして、社会的な発言をしていらっしやる方です。

**永瀬博美**：私は石川島プラント建設という会社に勤めています。「サルトルと私と情報公開」というこのちらしを頂いて、梅林さんがサルトルの思想に学生時代に大きく影響された、その後の人生が変わるほど影響されたというのが、私には不思議に感じられました。私は今回のことがきっかけでサルトルの『存在と無』という本を読み始めたのですが、やはり難しいです。いったいどういってお話を伺えるのかなあと考えて今日は参加しました。

**唐木田健一**：唐木田健一と言います。小田原に住んでいます。失業者で失業保険がこの3月でくれました。自称サルトルの弟子です。

**菅家辰紀**：菅家と言います。私は工学系の勉強をしまして、ずっと技術屋としてサラリーマン生活をしてきました。そういう人間なんですけれど、何でこんな話をするのかと言うと、科学技術的な興味という意味でいろいろと考え出しますと、哲学や思想というところに行き着きまして、そういう関心が非常に高くなりました。それは若い時からそうだったんですが、仕事を終えまして、自由な身になったものですから、みなさまには申し訳ないのですが、道楽としてそういう勉強をしているという状態です。そういう勉強の場で猪野さんと出会って、こういう場があるというのを知りうかがいました。そういうわけで、私の生活は、今日のお話にありましたような「実践」とはまったく繋がっていませんし、当面繋がる見込みもないのですが、今日のお話しはある意味で非常に刺激を受けました。これからの私の勉強の幅を広げることになるといいなと思って感謝しています。

**樋野誠一**：こぶし書房という出版社の樋野と申します。毎回、書籍の販売で越させて頂いているんですけど、まあ、自分としては単に販売だけでなく、いろんな先生方や読者の方と接触する出版社というのはあまりないんですね。会社に閉じこもっているだけで。だから、こういう機会にはなるべく参加してゆきたいなと思っています。今日の梅林さんのお話しを聞いて、これまで梅林さんというと「反トマ」の方だという印象だったんですが、もっと思想的なサルトルなどのお話しを聞いて驚いたというか、感銘を受けました。

**山本 實**：山本實と言います。鎌倉に住んでいます。私は年が81歳です。1926年生まれで

す。したがって第 2 次世界大戦にも一応参加しています。私は元は技術屋なんです。科学者というより技術屋です。特許関係の方面にいました。それで、その過程で私は自分の勉強した技術が人のためにプラスなるんならいいんだけど、結局戦争みたいなものに参加するなら、それが人を殺す道具のようなものになってしまうんですね。そうすると、果たして技術というのは人間に対してどのようなものなんだろうとずっと戦争が終わってから疑問だったわけです。それで労働運動にも一応、みんなから押し付けられたというか、ある組合の書記長をやったりして参加していました。それから戦後に、戦後文学というのがありまして、それまで文学というものにも縁がなかったものですから、大変興味を持ちました。それからフランスの思想です。まあ、いろんなことをあちこちやっているわけですが、技術というものが人間の幸福にうまく結びつかないかなあと思っています。技術者は技術的なことを学んで、これこれこうしたら作れるというようなものは多いんですが、バックグラウンドのものは少ないんですね。一種の職人的な仕事ですからね。まあ、そういうことで偶然、町の新聞でたまたま出ていた「湘南科学史懇話会」というのを見て、そういう機会はありませんもので、どういうことをやっていらっしゃるのかなあと思っていて、興味を持って何度か出席させていただいて、勉強させて頂いています。今日の話も大変おもしろかったです。サルトルという人もなかなかですね。たしかサルトルには『自由への道』というような本がありましたよね。人文書院から出ていたと思いますが、あれは完結したんでしょうかね。完結していないのではないかと思うのですが。ということで、どうぞよろしくお願いします。

**田邊好美**：田邊と申します。今日のお話しで出てきた市民とか主体とかいう話になると、サルトルがでてくるんでしょうが、さきほど『存在と無』の話ができましたけれど、私はあれを大昔ちらっと見たんですが、まるっきり分かりませんでした。日本語のほうが特に分からなかった。翻訳はどちらで今、読まれているかわかりませんが、あれが分かたら奇跡だなというふうに僕は思っております。サルトルの書いたもので、短いものは読んだんですが、あんまりよく分かりませんでした。でも、まあ、人並みに影響を受けたということはあるとは思いますが、あんまりよく分かりません。市民ということで、よく「草の根」ということを言うんですが、先日ある人と話をしていて、「どうも浮き草だよ」と。私自体があんまり根っこを張っているとは思っていませんで、浮遊しているほうなんで、「浮遊している市民」としてはどういうふうにやってきたらいいかなあと思っています。原子力関係はあんまり首をつっこんだこともありませんし、まあ、根無し草でございます。

**笹本征男**：笹本征男と申します。3年か4年前に梅林さんから国連軍の問題で大変貴重なお話を伺って、お目にかかるのはそれ以来です。私は今は仕事はしていないのですが、ずっと関心を持ってきたのは、第 2 次世界大戦の時にアメリカが開発して日本に投下した原子力爆弾の調査の問題でした。その過程で梅林さんとは共通な認識をもっているんです。一番最後におっしゃった日本の風土の問題ですね。その風土の問題をいろいろと議論したいと思えます。原発の問題でも言うまでもなく臨界事故が起きていたということがあります

ね。ああいう形で殺されてゆくということは許しがたいことです。それから、原子力側が今直面している問題では、放射線研究所という組織が広島と長崎にありまして、74年まではアメリカの機関はABCC（原爆傷害調査委員会）。それで日本の協力機関の名前が、こちらのほうはみなさんほとんどご存じないんですね。広島・長崎放射線影響研究所（放影研）です。これは厚生省の機関です。その放影研に具体的な資料を請求しました。そうしたら、面白いことが起きましてね。1947年から53年まで、広島・長崎で原爆の被害を受けた子供達を調べ上げて、その結果は1956年に報告書を公開したんですが、それは広島・長崎における妊娠中絶への原子爆弾の影響という報告書です。それを送ってくれと請求しました。そしたら1部しかないから送れないと言われたんです。そこで「冗談じゃない。それは日本国民の税金を3000万円も使ってやった報告書なんだから、日本国民の財産なんだ」と言って請求しました。そうしたら向こうが面白いことを言いましてね。「その報告書はアメリカのナショナル・アカデミー・サイエンスから出ている。だからアカデミー・サイエンスに直接話を持っていったら、向こうのほうでコピーをして送ってくれる」と言われて、非常に驚きました。逆に言うと、そういうことを請求した人間がいなかったということです。それからもう一つは、今言いました広島・長崎放射線影響研究所のことを知りたいから、国立予防研究所の年報をくれと言ったんです。この機関は厚生省所管の国立予防研究所の広島・長崎の管轄に入っていて、その年報の一番後ろのほうに放影研の情報が入っているから、その部分をコピーしてくれと請求しました。そしたら、送ってくれました。だけど、ほんとに衝撃を受けました。1947年に広島・長崎放射線影響研究所ができてから1952年頃までの記録がほとんどないんです。こんなふざけたことはない。これも逆に言うと、そういうことを請求した人がいなかったわけです。この2つのことから、梅林さんのおっしゃった日本の風土の問題、それから公文書がいかに大事だという問題もその通りです。ものすごく大事です。それについていかに日本国民がいい加減に考えているかということを感じています。また議論の段階でそんなことも話せたらと思います。どうぞよろしく願います。

**大築 新**：大築と申します。生まれたのが1950年で、ちょうど高校卒業の年が69年の3月でして東大の入試がない年にぶつかったんです。それで、私自身は理科系の学部に行こうと思っていた矢先に、自分のやろうとしていた学問がもはや中立的なものではなくて、体制に奉仕するものだというようなことを知って、大変悩んだんです。ちょうどその頃に『ぶろじえ』の存在が「読書新聞」で紹介されたんです。今でも覚えているんですが、その紹介をみて、「これだ」と思ったんです。その時は『ぶろじえ』の現物は手にすることはできなかったんですが、それ以来、非常に気にかかっただけで、梅林さんの書かれたものや、高木仁三郎さんあるいは山本義隆さんのような方の書かれたものを読みまして、私よりもかなり先輩方で自然科学を専攻された方々の、書かれたものだけではなくて「どういう生き方をされているか」ということに非常に影響を受けたんです。それで梅林さんのお顔を拝見するのは今日が始めてなんですが、『抵抗の科学技術』を読んだ時にも非常に感



銘を受けまして、単なる学問だけではなく、生き方として全体化を追求するということと、さきほどのお話の自然科学としての部分的な自然と全体的な自然というの関係が並行になっているということが、非常によく分かりました。私の専攻は、一応地球物理なんですが、その時にやはり、物理的な目で見た地球と生物学的な目で見た地球と地学的な断面で取った地球とを全部足し合わせたら「全体的な地球が再構成される」のか非常に疑問に思いました。それは違うだろう。自分の考えている自然とはやっぱり違うということで、結局、自然科学者になるのは辞めた。というか、落ちこぼれてならなかったんですが、そういう意味では梅林さんにもう一度「科学技術論の全体的なこと」を書いていただいたらなあと思います。

**戸田盛康**：戸田と申します。中学・高校で生物を教えています。『ぷろじえ』を何冊かを読みました。どこで手に入れたかはあまり記憶にないんですが、70年か71年くらいじゃなかったかと思います。それから、『抵抗の科学技術』は出てすぐに読みまして、濃い熱意が伝わってきました。まあ、僕には難しいなあという感じもありました。僕自身はその後、ナチュラルヒストリーのほうにいつちゃいまして、ちょっと科学技術というところからは離れてしまって、申し訳なかったと思うのですが。今日の話の中でひとつお聞きしたいんですが、アメリカの情報公開法でアメリカの公文書を見れるというのは、日本からも見れるんですか？そういうふう聞こえたんですが、アメリカ国民のための情報公開だと思うんですけども、日本から読めるということなんでしょうか？

**片桐 薫**：片桐と申します。グラムシを研究しています。猪野さんと知り合いになれたのは、去年、飯田ももさんの例のユリシーズの報告会の折でして、猪野さんに「実はグラムシにも科学論があるんだ。これはほとんど今まで注意されていない。日本のグラムシ研究者の間で論議されていないけれど、どうだろうか」と言いましたら、すぐに猪野さんが取り上げてくださりまして、先月、「グラムシの科学論とわれわれの時代」ということで報告しました。実はその時に私は科学者にご意見をもらいたかったんです。そこには科学者の方も何人かいらっしやいましたけれど、私が理解しているグラムシの科学論を科学者がどうとらえているかを率直なところを伺いたかったんですが、私の納得のゆくご返事がなかったんでね。あの時に梅林さんに出て頂いていたら、私のグラムシ理解がちょっと違ったんじゃないかと思います。それともうひとつは、知識人の問題を調べていまして、今日のお話しと非常に交錯する部分がありますし、また違う部分もありますので、できればあとから時間をいただいて、ご質問をさせていただきたいと思います。

**薮 玲子**：薮玲子と申します。2003年からピースデポに週に2回ほど梅林さんのお手伝いという形で通っているのですが、梅林さんとはしょっちゅう顔を合わせていますが、今日、その運動の元になったところをお聞きして、とても面白かったです。私自身の紹介を少ししますと、いろんなことに興味を持って、いろんなことをしているんですが、特に科学技術と社会の問題について関心を持っています。それで、最近思っていることは、携帯電話を私は持っていないんです。なぜかと言うと、持つ必要がないからです。ラッキーなことに、

仕事でも必要ないし、高齢の親がいますけれども今のところ元気なので携帯電話を持つ必要がない。ところが、私の周りを見ますと、私と同じように持つ必要がない人でも持っていて、その人たちに聞くと、いったん持ってしまうと、「もう携帯電話のない生活は考えられない」と言うんですよ。梅林さんは今日、2歳児くらいの幼児の教育に興味を持ったとおっしゃいましたが、今のこの世界にぽつと生まれてきた子どもというのは、携帯電話がなかった時代のことは知らないし、それが当たり前と思って育ちます。もうひとつ例をあげると、私は電磁波のことを勉強しているんですが、IH クッキングヒーターという、火を使わないで調理ができる電磁調理器が普及してきています。火を使わないので安全だとか何とか言うんですが、あれを使っている家で育った子供というのは、たぶん火を見ないで育ってしまう。炎というものを知らないまま育ってしまう。このように、科学技術が進むことによって、それまでとは違う環境の中で、全く違う子供が作られてくるんじゃないかと感じます。私はパソコンを見ていると、とても目が疲れるんですが、今、生まれてすぐパソコンの光を見て育つ子は、私たちとは全く違う「疲れない目」になるのかなあ・・・どうなんだろうと思ったりしています。

**廣政直彦**：廣政と言います。東海大学に勤めています。専門は科学史なんですけれども、科学史といっても広いんで、もともとは19世紀の物理学史、統計力学とか熱力学とか電磁気学とかの形成史、それからやはり20世紀はじめのアインシュタインあたりをやっていたんです。けれども、だんだんとじゃあ一体それがどういうふうに日本に入ってきたんだろうかというところに興味をもって、特にユングという物理学者がいるんですが、彼のことを調べています。今度、サバティカルをもらったんでそれに組み込む予定なんですけれど、それをやっていると、じゃあ一体、そういう近代的な物理学を受け入れた当時の日本のバックグラウンドにだんだん興味を持って来て、日本の科学思想というようなこともやっているんです。でもまあ、あまり遡っちゃうと大変なことになるんで、せいぜい幕末から江戸時代の中期以降、これはもう専門というより、もっと広く浅く調べています。ただ、なかなかきちんとした論文にまとまらないという状況です。

**猪野修治**：どうもありがとうございました。時間もあまりないもんですから、今、自己紹介をかねていろんなことを伺いましたので、手短かに梅林さんのほうから応えていただいて、それで4時30分になりましたら、途中でも打ち切ります。では、ちょっとお答えをお願いします。

**梅林宏道**：井野さんからご指摘のあった「枯木陶」という話ですが、これは他の方には背景を説明しないと分からないと思うんですが、さきほど出てきた山口さんと共同で、たしか講談社だったと思うのですが、『日本』という月刊誌の懸賞論文に「枯木陶（こぎ・とう）」というペンネームで応募したところ優勝したんです。それで、本を書かないかということになって、本になったんです。それで「枯木陶」の頃に展開していた事と、『ぷろじえ』との間にすごくギャップがあるというのはご指摘の通りなんですけれども、私の中ではわり

と繋がっていて、見かけほどはギャップはないという感じなんです。自分ではそういう側面もあるかなと思っています。

それから、サルトルに次ぐ思想があるのかということですが、私は今でも生きています。サルトル生誕百年で結構本がでました。最近は入門的な紹介書というのも出ています。そういうのも読みましたけれど、わりと今の「携帯時代」というか、「ITの時代」を予言していたようなところもありますし、私はそんなに古いとは思いません。それから、乗り越えられたとも思いません。ただ彼が挑戦したことはあまりにもでかすぎて失敗をした。ただ課題自身は残っている。というような認識でいます。

放影研の情報公開の話は、今聞いて、僕はぜひ詳しいお話を聞きたいなと思ったのですが、実は同じようなことを考えたことがあって、放影研の人に私は言ったことがあるんです。今、反核運動といわゆる放射線障害を研究している人たち、つまりそういう良心的な研究者たちと反核運動をしている人たちとの間にある種のコミュニケーションギャップがあって、それは被曝二世にどれだけ影響が残っているかということについて、被曝者の側には情報を隠されているんじゃないかという非常に深い疑心暗鬼の気持ちがあるんです。ところが、わりと良心的な医学的研究をした人の疫学的研究だと、単に社会的配慮という問題ではなく、まあ、たしかに社会的配慮というのは大きな要素ではあるんですが、でも、そういう問題ではなくて、放影研のデータとその後の疫学的調査を含めて、なかなか結論が出せないという側面があるみたいなんです。けれど、放影研の持っているデータは全部公的なデータなんだから、しかし、個人情報が含まれているわけだから、専門家委員会というようなものを放影研が言い出して、公開ではないけれども専門家が10年くらいかけてすべてのものを検討して第三者結論のようなものを出すようなシステムをなぜ組織しないんだというような話をしたことがあるんです。

**笹本征男**：大事なことです。今おっしゃった ABCC がらみの話は必ずこういう答えが出てくるんです。隠したものがあるんだと。それはそれに対して僕は知りませんと言うんです。軍事情報なら当然隠すことがありますからね。ただ、こういう問い方はされたことがないんですね。たとえば、1947年から74年までの28年間に ABCC で報告されたものが何本あるかという、1000本あります。それから放映研のものが1000本。あわせて2000本あるんですよ。これをどう見るんですかという問題です。これは公開されているんですよ。

**梅林宏道**：私が今、言いたかったことは、情報公開をして白黒つけないといけない領域の問題を、それをやるという姿勢がまずないんですね。でもね、運動をやる側もその姿勢でやらないとダメなんです。

**笹本征男**：僕が放影研に請求して、放影研が持っている1947年から74年までの総括した報告書を送ってきたんです。その中には悪い面といえる同意書が10数本、それから契約書もあったんです。日本政府の昔の予防衛生研究所と ABCC の間に交わした同意書、長崎市長と広島市長と ABCC との間に交わした契約書、それと広島県知事と ABCC との間の契約書。それで昨日、私が行った会合に偶然に広島で被曝した後にブラジルに移民した被曝者

が2人来ていたんです。森田さんという人が80歳、もうひとりの方が66歳で、その森田さんが被曝後にABCCから調査を受けたと言うんです。調査を受けたら、個人情報としてデータは残っているんです。それを請求して、見たというんです。そういう話を昨日したばかりなんです。実はその時、僕は他の人に渡すつもりでその契約書のある報告書のコピーを持っていたので、それを森田さんに渡したんです。それはどういうことかと言うと、今おっしゃった通り、運動側もその問題を知らなかったし、それを追及していないということなんです。それが問題なんです。しようとしなかったことがですね。梅林さんのおっしゃったように、あのデータは非常によく利用されていますね。全世界的に。それをもっと公開しなくちゃいけないんです。

**梅林宏道**：それとちょっと似ていることをご紹介しますが、日本がアメリカのアフガニスタン攻撃に協力するために「テロ対策特措法」を作って、2001年の11月にはじめて戦場に海上自衛隊が出たわけです。船は何のために行ったかという、米軍に給油をして、その米軍がアフガニスタン攻撃をする。日本は戦闘には加わらないけれども給油だけはするという、テロ特措法の枠組みの中の活動なんです。だけど、目に見えないところでやっているわけだから、どういうことをしているかを知りたくて、その時の海上自衛隊の船の航海日誌の公開を請求したんですね。すると、日本では情報はいっさい出てこないんですね。全部墨塗りで、途中の寄港地も消されていて、出発した日と出発した港と、帰ってきた日と帰ってきた港だけ、つまり誰でも知っている情報しか出なくて、あとは全部真っ黒に塗られて送られてくる。ところが、同じ期間のアメリカの軍艦の航海日誌を情報公開法で請求したら、全部出るんです。それで日本の船から給油されたりしている場面が書かれているんです。それで、日本側の対応に対しては、ずっと異議申し立てを出し続けているんですが、ずっと拒否をされ続けていて、ただ、これはこれからもやり続けていこうと思うんです。これをやり続けていないと、航海日誌の保存期間は5年なので、捨てられてしまうんです。だけど争いがあると捨てられないからということなんです。ですから法的整備もおかしくて、日本の国論を分けたような議論をして出て行った船の行動を残している航海日誌というのは、今のところは、請求していないと5年でなくなってしまう。それはあってはならないことです。それはまた別の法的整備が必要なことと思うんですが、とにかく、そういう状態があります。

先ほどのご質問ですが、アメリカの情報公開は日本からも請求できて、日本人にも公開されているんです。これはある意味でアメリカが国際的に生きている国だという自覚からきていると思うんですね。ですから、アメリカの税金で出来ている文書であり、アメリカの市民の持ち物けれども、国際的な関心には応えます。基本的には情報公開法の中に国籍条項はないんです。日本の公開法もそうになっていて、アジアの人たちでも誰でも請求できるということになっているんです。ただし、文書の中には海外の人には見せるなという判子のある文書もあるんです。したがって1回目のフィルターでは、その判子の押してある文書は排除されて、非公開になると思うんですけれど、僕の経験では、アメリカの友人

に頼めば取れてしまうものなわけですから、2度目に請求して「そういうのはおかしいじゃないか」と言うと、出してくれます。

**猪野修治**：あとグラムシについてはいかがですか？

**片桐 薫**：それは私から質問しちゃったほうが早いですね。先ほどどなたかがおっしゃったサルトルに対する評価が落ちている話ですね。私はこの原因はフーコーの批判にあったように思うんです。その時のフーコーはサルトルの理論そのものについての批判ではなくて、要するに知識人に指導的役割を与えていないことに対する批判、それから知的前衛主義に対する批判だったわけです。私はどちらかというとその意見に賛成なんです。私はグラムシを調べていまして、戦前のグラムシの「獄中ノート」の中の知識人論に関しては、第2次大戦後、つまり70年代以降はほとんど言及されていないんですね。むしろ私の調べたところでは、主な人をあげますと、ジャコビィ、彼はアメリカの最後の知識人でアカデミズムの知識人論を猛烈に批判しているんです。それからチョムスキーですね。彼は科学者の支配に対する批判ということで、バクーニンの例を引いて、国家と知識人という問題で先ほどのベトナムの運動時代に書いたんです。これも私は非常におもしろく読んだんですがね。それからもうひとつは最近のサイドですね。彼は湾岸戦争を背景にBBC放送で「知識人とは何か」という講演をしているんです。そういうところにはグラムシなんかは全然でてきてないんですね。出てこないというのは、状況が変わってきている。つまり知識人の役割が大きく変わってきている。もう、かつてのグラムシが考えていたような知識人論ではなくて、今日の文化が変わってきている中ではやはり知識人の役割も決定的に変わっているんじゃないかというんです。私はその意見に非常に賛成で、そういう目でみてゆくとグラムシの知識論がほとんど引用されない理由が私なりに理解できるんです。私は先ほどおっしゃった情報公開ということを非常に興味深くお伺いしたんですが、私のグラムシの知識人論に対する関心は、「科学と主体」の問題を考えたことなんです。要するに科学の担い手は誰かということを考える。それでご存知のようにサイドはイスラエルの学者で最近アメリカで亡くなったんですが、彼は知識人の問題を自らの問題として定義しているんですね。その点はグラムシにもなかったし、チョムスキーにもなかった、新しい知識人というのを定義しているんじゃないだろうか。その点では、梅林さんの活動されてきたお話を聞いて、「理論ではなくて生き方」という面で共通する点があるんじゃないかなあと感じて聞いていました。これは私の感じたことです。

**梅林宏道**：知識人という言葉が今日は何度か使ったんですが、今その言葉を使うとどういうものとして社会的に存在するのかなあというのが分からなくなっていると思うんです。

**片桐 薫**：そう、知識人の概念が変わってきているということですね。

**梅林宏道**：ええ。だから、いつもなんていう言葉を使ったらいいのかなと思うんです。すでに総大学生時代ですし、その中で私は知識人だと思うという存在のしかたというのが、今はもうなくなっているんじゃないか。知識人論と言っても、理解していただけるのだから

うか、若い人に伝わるんだろうかと、そういうところをまず思いました。

**猪野修治**：他に意見はありませんか？そこにいらっしゃる大築さんは翻訳家で昔から私の知り合いですが、東大闘争の時に、東大だけは行くまいと思って東北大に行った人なんです。現実にもそういう人がいるわけです。その隣りにいる戸田さんは物理学の出身でしたけれども、あの時代の物理学帝国主義に違和感をもって生物学に行って、今も生物をやっている。それから、大学の研究者を意識的に辞めたという人が私のまわりにいっぱいいます。いわゆる教育と名のつくところから完全に辞めて、ガードマンになったり、肉体労働者になったりした人がいっぱいいるわけです。そういう人たちに共通に流れる思想というのは、東大闘争の時に自己否定とか自己解体とかがずいぶん流行りましたが、梅林さんはフランシス・ベーコンの「知は力だ」という話を逆手に取って、こういう問題に関わっていらっしゃるけれども、梅林さんの大きなところだと私が思うのは、サルトルの現代思想について、書物の上でやっている人間はもうサルトルは古いんだとかフーコーはどうだとかメルロ・ポンティはどうだとかいろんな議論がありますけれども、そういうことを言うのはほとんどアカデミズムの連中ですね。現代思想をやっている連中です。あの時代、1970年代に梅林さんがサルトルから影響を受けて、なおかつ、自分の知識をいかに生かすべきかということをも自問して、あの運動に自分の理念と運動と現実を投じたわけでしょう？そういうところでサルトルとの関わりのお話をされているわけで、その辺のところを理解しないとイケない。単なるアカデミズムの議論とはちょっと違うんじゃないかなあと思います。

実はこれでもう時間がないんです。私は最近思うんですけど、梅林さんは普段はこういう話はあまりなさなくて、普段は百戦錬磨の実践的な話ばかりなさっていますので、今回はいい機会じゃなかったかなあと思います。東大闘争の時代の人たちがいわゆるアカデミズムの科学史家になったり、きわめて指導的な市民になっているわけですが、私が付き合っている限りにおいては、非常に排他的であります。他者の生き方に対して排他的という感じを受けています。つまり、ある一人の高名なドイツ思想家と言われる人が、梅林さんみたいな人は即物主義者であるという言い方をするわけです。私がそこにいるといつても大喧嘩になるわけです。それから、もうひとつ、あの時代を生き抜いた僕らの世代が、いろんなところでいろんなことをやって、それなりに力を出したり、物を書いたりしているわけですが、少なくとも接点があるのならどこかで繋がっていいものを作りたいなと私は思いますが、ほとんどありえない。私は非常に絶望感を持っています。だからこそ、先ほどのトランスファレンス、多種多様な人たちがあの時代に何を言ってきたのかは知りませんが、もう一度一点に繋がりがながら、動きを作っていきたいという思いをもっているんです。

今朝、梅林さんから電話があつて、「忙しくてレジユメが作れない。ついては『ぷろじえ』の文章をコピーして渡してくれ」と言われたんですが、1969年に、つまりもう40年も前に書かれた文章をこうして「レジユメ」に使うことができるということに私は大変感激しているわけです。

今日のみなさま方の発言は記録に起してホームページに載せたいと思います。みなさんよろしいでしょうか。発言の趣旨は曲げませんので、ご了承いただけますよう、どうぞよろしくお願いいたします。今日はありがとうございました。(終) (文責：猪野修治)